

川のこと、川と自分達の関係を考えなかつた。

だから人間の歴史がそのまま川の歴史でもあつたといえようか。ところが現在、この歴史の過程に、かつては夢想もされなかつた要素が加わつてきた。大げさでも何でもなく、人類史上例のない経験で、日本を含めて世界の、世にいう先進国の科学技術と経済との発展が生み出したもので、日本はその特殊状況から、特にその影響を色濃くしている。というのが識者の一致した見解である。

この土浦の町にかかわるところでは、霞ヶ浦もろとも桜川が死活の竿頭に立たされていくということである。人災が自然の生命をむしばむ、自然に対して人間が悪しき攻撃をかけた始末ともいえる。人間の英知が問われる時がきているのだ。土浦をも含めて、桜川の流域にあつてこの川と生活の上でかわる町村ぜんぶが、無限に近い恩恵を人間に贈りつづけてきた、この川や湖を見殺しにして、その返り血を自分も浴びる愚を敢てするのだろうか。

木華開耶姫の靈はゆかりも深い桜川の行末を見守つてくれぬのであろうか。

産業道路を市内から虫掛に向い、古い虫掛の木橋の下

流に出来た新しい鉄筋コンクリートの橋畔で車をすてる。橋の長さ二百四十歩、橋下を流れる桜川の川巾は、南北の二つの堤防に挟まれた川原の十分の一位の中で、晴れた空とややうすつき始めた陽の光の中に浅黄に流れている。釣人が川岸に腰を下して数人おり、四ツ手網の小屋は古びて、枯れた芦の茎とその根元の萌え上る若芦の青が鋭い対照を見せる。東方にひろがる土浦の町の姿は、大方、方形と直線から成る灰色の近代的建築に塗りつぶされ、種々な用途をもつ塔状の施設が百位天空をついていく。交通量は日に夜をついで増加しつづつある。この都会化の波に洗われるこの町もエゴイズムの追求のみに終われば、自分を患苦しく追い込むばかりである。

北側の堤の上を市中まで歩く。戦後植え替えたかほそい桜の若木、少しの蛙の声、昔に変わらぬ雑草の種類が堤の斜面を覆う。乗りすての車、駐車場として利用される堤。まだ英知が、ここに十分の手をのばしてはいない。